

GALLERY HEKI

菊地匠：In Pause

2019 年 5 月 2 日（木）－ 14 日（火）ギャラリー碧



展覧会概要

この度、ギャラリー碧では足利出身作家 菊地匠の地元での初個展を開催いたします。菊地匠は、東京芸術大学で日本画を専攻した後、同大学大学院芸術学を終了。大学院卒業後には、自身で企画した個展を東京で開催し、その時すでに既存の日本画という概念の枠を超えた表現を発表。現代アート作家としてのスタートを切りました。

この度の個展では、以前から試みている「In Pause」というテーマで、平面作品を中心としたインスタレーション型展示に初めて挑戦いたします。紙に顔料で描かれた花々や、人物像は繊細かつ新鮮で、観る人に爽やかな印象を与えます。しかし、一見ただけでは分からない、自身の哲学を裏に秘めており、制作技法にもその考えが現れています。

今回発表される作品は、すべて新作です。展示はあくまで平面作品が中心となり、その世界観をより人々に訴えかけるよう、インスタレーションが彩ります。作家自身何度も会場を視察し、綿密にイメージを構築した渾身の個展となります。

展覧会詳細

＜東京芸術大学から、自身企画の初個展まで＞

菊地匠は、東京芸術大学で日本画を専攻するも、日本画というものの現状や教育のあり方に疑問を持ち、大学では芸術学を選択します。西洋哲学や芸術観に深い関心を持ち知識を吸収、過去の憧れる作品や作家と自身との距離感を測るという感覚を持ちます。既存の考えに追随することへの危険性や躊躇といった考えも生まれ、そういった関心が、大学院の卒業論文に収斂します。その論文は高く評価され、2017年にサロン・ド・プランタン賞を受賞することになります。

大学院卒業後は、自身で企画した初個展を東京で開催。本人が影響を受けたと話している作家イリヤ・カバコフと同様に、会場全体で一つのストーリーを構成する展示となりました。その作品一つ一つからは、彼が培った技術の高さと多彩さが感じられ、来場した人々を驚かせました。さらに、この初個展では特に、会場全体を使った展示構成力の高さが示されました。

＜今回の展覧会のテーマ「In Pause」＞

「Pause」とは、英語で「小休止」や「区切り」を意味する単語です。菊地匠は、ドイツの詩人ヘルダーリンの作品「生のなかば」に強い関心を示し、詩の中にある中間休止、いわばリズムが途切れる場所に「美」を見出す感覚に強く惹かれます。それは、不在に対する美しさ、失われた部分に対する憧れといった感覚とも捉えられ、失われた過去の詩の文法(アドニス格)に対する本人の関心ともつながっています。

小休止、つまり一度立ち止まることの大切さというテーマは、大学院での論文の延長上ともいえるもので、作家にとって重要な課題であり、論文などの文章だけでなく一貫してアート作品として表現すべきものと捉えられているのです。

＜作品の魅力 その技法＞

描かれた花や、人物はたっぷりとした余白の中で浮かんでいるようにも見えます。画材は紙と岩絵の具で、近づいてみると載せられた後に、拭い去られているのが分かります。完成させることへのためらい、そして痕跡として残ったもので表現された生物は、鮮やかながらもどこか不在を感じさせ、それがテーマである「Pause」「失われた美」そして一度立ち止まることの大切さにもつながってゆきます。描いてはふき取るその行為そのものに意味があり、その過程を感じとりつつ、生の儚さや危うさを見いだせるのが魅力です。

そして、何より作品一つ一つというより会場全体が彼の表現となります。今回は特にインсталレーションを交えた展示です。ぜひその場で菊地匠の大きな世界観、その流れの中の一つとして作品を感じ取って頂けたら幸いです。

ギャラリー碧 山口由紀